



フィグ・ヤーパン通信

第25号

FIGU-JAPAN BERICHT, Nr.25

発行日 2006年1月1日

発行 フィグ・ヤーパン <http://jp.figu.org/>

新年あけましておめでとうございます

新年を迎え、読者の皆様に謹んで新春のお慶びを申し上げます。

昨年はコンタクト記録シリーズ第2巻『プレアデス/プレヤール人とのコンタクト記録(2)』や小冊子『ビリーの少年時代の著作』を出版することができました。さらに、FIGUスイス基幹会員のリッカウアー夫妻を招いて、瞑想をテーマとした講演会を行い、多くの読者の方にご参加いただきました。この他、ビリー・マイヤーの代表的な著作の一つである『瞑想入門』、高次の霊形態からのインスピレーションによる『アラハト・アテルザータ』、プレアデス/プレヤール人とのコンタクト記録シリーズ続編等、翻訳に関する作業を数多く進めることができました。これもひとえに、読者の皆様からの暖かい励ましと、ご支援があつてのことです。フィグ・ヤーパン一同、厚くお礼申し上げます。

今年は、『瞑想入門』、『プレアデス/プレヤール人とのコンタクト記録(3)』、『アラハト・アテルザータ』の出版を予定しております。いずれの書籍も、改訂された最新版のドイツ語原書が用いられ、複数の翻訳専門家によって翻訳・校正が行われています。このため、通常よりも時間と費用がかかりますが、フィグ・ヤーパンでは、原著者との契約に基づいた翻訳校正の手順を守り続けています。『瞑想入門』は、翻訳作業中に原文が改訂されたため、出版が延期されてきましたが、春までにはお届けできる予定です。その他の二冊については、翻訳を完了

し、現在校正作業中です。なお、いずれの書籍につきましても、水瓶座時代出版からの出版を予定しております。

昨年は、フィグ・ヤーパン設立以来、翻訳出版をはじめとする最も多くの活動を行うことができました。このことは喜ばしい反面、活動の進展とともに翻訳出版や発送等に関する作業量が増加し、生計を立てるために必要なメンバー各自の仕事との両立が課題となっています。このためフィグ・ヤーパンでは、組織形態の見直しを含む複数の対策を検討中です。翻訳出版活動は、日本におけるFIGUの中心的なミッションとなります。その作業は、息の長い活動を通じて、静かにそして確実に進めることが大切です。これまでに翻訳出版できたものは、FIGUの多くの著作の中のごく一部に過ぎません。しかし、講演会等で出版物を通じて新しい読者となられた皆様とお会いする機会がある度に、ミッションが少しずつ進展していることを実感し、勇気づけられています。翻訳出版をはじめとするFIGUのミッションを進めるためには、その価値を見出された読者の皆様のご理解とご協力が必要不可欠です。引き続きフィグ・ヤーパンの活動をご支援くださいますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

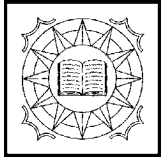
末筆ながら本年が皆様にとって実り多き一年となりますことを祈念致します。

平成18年 元旦
フィグ・ヤーパン一同

ビリーの著作を読み学ぶことについて

—ビリーへのインタビューを終えて—

アトラント・ビエリ



正しい勉学とは終わりが見えない巨大な爆発である。それはまるで宇宙のようにどこまでも無限に広がっていく。(ビリー 2004年1月10日)

学校や大学などでは「学ぶ」ということは、情報内容を意識の中にしっかり取り込むこととして理解されている。大量の文章を読み、できるだけ多く記憶するように努め、その重要な部分を試験で再現し、終われば再び大部分忘れてしまう。扱われた教材の蓄積と、記憶の中から呼び出すことのできる材料の蓄積を比べると、前者は後者より数倍も多いことが確認されるだろう。学校での勉学は、遺憾ながら分厚い百科事典をめくるようなものである。数千ものページが入っては出ていき、結局のところ自己形成にはあまりつながらない。それはあたかも海の波に浮かぶボートが上下に揺られるだけで前進しないのと同じだ。とはいえ本は決して無益ではない。本の中には地球の文化の知識がまどろんでいる。教育機関やメディアが絶えず社会を歪め、無自覚な人生における一時的な経験であるかのように、本を変えてしまったのである。学ぶ者とビリーの著作の深い理解との間に横たわっているのは、このようにして身につけた本との悪しき関わり方である。

学ぶことは読むことを前提とする。「読む」とは多義的な概念である。それは必ずしも文字言語に限られたものではない。昆虫研究者はたった一つの文字も目にするこなく蝶の行動について学ぶ。彼は形、色および運動の中に蝶の行動を読み取る。読むとは単に言葉を解説するだけでなく、もっと一般的に世界を基本的な記号、すなわち形、色、速度などに基づいて解釈し、そしてそれらを観念に翻訳することを意味する。

したがってある文字を読むとは、紙に書き留められた観念を無言で伝達することである。たとえば「木(Baum)」は一つの観念である。しかしB-A-U-Mという文字の順序自体は植物と何も関係ない。自由に考え出された文字が、自由に考え出された順序で並ん

でいるにすぎない。このような文字列から生まれた「木」という観念は、現実の対象、すなわち細長く、多数枝分かれして葉で覆われた形成物と結び付いている。もちろんこの定義は絶対的なものではない。別の誰かにとっては、「木」という観念は、居間に置かれてクリスマスの最後の晩に燃やされる物である。往々にして人は同一の観念に複数の観念内容を結び付ける。それらの観念内容はそれぞれ人によって異なる。

文字によるコミュニケーションは、文字言語によって観念を交換することである。たった一つの観念が無数の意味を持つことができ、しかも人によってそれぞれ別様に解釈されるのであるから、送り手にも受け手にも上手で明確なコミュニケーション、そしてまた慎重さと誠実さが求められる。多数の解釈が可能であるため誤解の種は尽きない。言語の扱いを上手に行うために必要な慎重さは、残念ながら読者に生まれつき備わってはいない。

言語は一方では知識を伝達するための道具であり、他方では足で踏み付けにされる使い捨て製品か、あるいは娯楽と気晴らしを求める人間の欲望を満たす燃料である。メッセージを求める読者の渇きを癒すために、メディアは毎日膨大な量の文章を生産する。そうしたメッセージは寿命が短い。それらは読者に最初に接してわずか数秒もたてば過去に属する。それどころか多くのメッセージは読者が興味を持たないため、この世に生まれることすらない。メディアはサラダビュッフェのようなもので、自分の好きな物だけ取ることができ、極めて脂っこく不健康なソースをかけることも厭わない。

言語は啓発に導くものであるだけでなく、愚かさを極めた乱飲乱舞の狂宴でもある。読むことは学問であるだけでなく、麻痺させる陶醉でもあり、そこでは言葉の意味は無意味となる。まさに言語は一義的ならざる観念からなるという理由から、言葉の意図的な誤用は、メディアに携わる者が発言の意味をあいまいにするための常套手段である。この場合読者も、文の内容のより深い理解を埋葬することに積極的に関与している。言葉の意味を完全に見極めることは手慰みではできない。理解することは一つの学問であり、享楽志向の怠惰な読者に対して労力を求める。しかしこうした読者にとって、言葉が何を

言っているかは、それらが直接呼び起こす感情ほど重要ではないのである。「ウイルス」、「情事」、「環境災害」あるいは「原理主義」という言葉で、彼らは毎日自分たちの情動の火に油を注いでいる。読者は文を丸呑みし、そして次の瞬間にはそれらを消化しないまま再び吐き出して他の人間に伝えるのである。情報は果てしない渦を巻いて流れ、英知の土地への視界を遮る。読者にとってはあいまいな印象だけが残るが、それらの印象はあつというまに色あせ、ついには別のあいまいな印象にかき消される。そして別の印象もまた薄れるのである。

このことはビリーの作品を評価し理解する上で悪しき前提となっている。ビリーが書いたものを上っ面だけでも把握し得るためには、読者は「読むこと」を再び学問的活動として認知しなければならない。

第一段階では自分自身の母国語を外国語として受け入れる謙虚さを発揮しなければならない。「畏敬」とは何か、「偽善」という言葉は何に由来するのか。まず母国語の言葉を正確に知ることが、ビリーの文章を読む者の最初の義務である。良い辞書を常に手元に用意しておくことは恥ではない。

辞書を使うようになると、一つの言葉がしばしば複数の意味を持っていること、また辞書でさえもっと正確な説明や定義を必要としていることに気づくだろう。辞書をよく使うと、一つの概念の背後には多数の観念があるという意識が芽生える。辞書とはすき鋤のようなもので、母国語の理解という踏み固められた土地を掘り起こして、観念や類例、隠喩や比喩などを明るみに出す。

ここに一つの例を示そう。

辞書によれば「死」という言葉は「生の終り」を意味し、「終り」は「限界」を意味し、「限界」は「境界のある領域」を意味し、「境界」は「縁」を意味し、「縁」は「表面」を意味し、表面は「体の外面」を意味し、「体」は「生」を意味する。

「死」という言葉が突然否定的な意味合いを帯びた概念ではなくなり、生成と滅亡のいずれにも関係した観念の宇宙全体を容れる器となる。

ある文に含まれた語をすべてこのようなやり方で吟味すると、文の内容はもはや単に表面的な印象にとどまらず、意識的になされた解釈の母体となる。この母体において正しいか誤りであるか、あるいは

真実か虚偽であるかということはもはや存在しない。たださまざまな可能性が存在するのみであり、それらはいずれも追求するに値する。したがって言葉に対する信仰は最初から排除されており、したがってまたビリーの文章が宗教的な教条に墮する危険もない。暗記することは本当の勉学に対する答えにはならない。言葉に従属することは本当の文章理解に対する答えではない。各々の語は宇宙であり、どんな文も多数の宇宙からなる。このようなやり方で言語に接する者は、実りある勉学に至る最良の道を歩むことになる。

勉学する者にとって次に登場する課題は、言語、単語、命題を人間存在の微小物質の境域、すなわち霊の領域に移し入れることである。それは文を内面化し、物質的な観念世界の彼岸を極めることである。言語の概念は意識の状態であり、したがって言葉や紙から解き放たれた微小物質世界にも属している。

これまで学ぶ者は種を外皮から取り出してあらゆる確度から観察し、その表面を理解しようとしてきた。今は種を肥沃な土地に埋めて、種が発芽し、芽が成長して爆発に至るようにしなければならない。だがその土地は砂であるかもしれない。そこは湿気を帯びた腐葉土ではなく乾ききった砂漠で、草はおろか、壊れやすい英知の植物も育たない。それゆえ学ぶ者は自らの内に入り、改めて干からびた大地を耕し、その内面において砂漠に灌水しなければならぬ。植物を育てようとするならば、種と良い土が必要である。英知を手に入れようとする者は、インプットと、それを受け入れる態勢を必要とする。この態勢は自明のものではない。学ぶ者はそれを自分で獲得しなければならないのである。

人間の内面は大地であり、世界は種である。「私」と「他人」との間には境界がある。そして学ぶ者の目標はこの境界を消滅させることである。英知はどんな草の茎の中にもあり、どんな雲にもどんな微風の中にも書き記されている。しかし英知は、その内面においてあらかじめ大地を準備していない者、種を荒れ果てた土地に落とす者には跳ね返る。

散漫な世界において集中は内面の砂漠に水を注ぐための魔法の言葉である。物質世界の豊富な印象に注意を奪われず、個々の印象の響きにすべての注意を傾けて聞き入り、音波を自らの内に受け入れ、そ

の内面に共鳴振動を感じて、最後には自身が響きや音波に、微風や雲になるのである。

正しく学ぶとは瞑想することである。文に盛られた純粋な情報は自己の人間存在に組み込まれない限り、人間の外部に、つまり人間の行動と存在の外部にとどまっている。しかし組み込むためには静かに思考し、物質世界から身を引いていることが必要である。組み込むためには時間が必要である。熟考と内省のための時間が。それゆえ人生においてビリーが書いたものを全部読んで熟考も瞑想もしたことがないというよりも、ビリーのたった一つの文について熟考し瞑想したことがある方が価値がある。勉強するとは知識を缶に集め、その缶をいつも持ち歩くことではない。勉強とは、「成る」ことを意味する。学ぶとは、動かない言葉を動かない事実として脳に記憶する過程ではない。勉強とは、自分自身がある特定の状態に向かって動き、自身が徳となり、自身が発言の真髄となることである。休閑地と外からこの耕地に落ちた種とが一つに溶け合い、成長する植物に、すなわち人間の内面で成長する英知になる。

これがビリーの言う爆発である。勉強は人間の内部で行われるもの、紙の上や本の中、記憶や想起においてではなく、物質的印象の彼岸で行われるものである。そのような勉強は終わることのない発展であり、決して終わることのない成長と生成の流れである。

発言の真髄は、いまこの瞬間における独立した洞察によってのみ把握できる。洞察を強要することはできない。いったん種が湿った土の中に埋められたら、あと必要なのは太陽と光と、そして静かに観察することだけである。静かに観察してこそ芽はぐんぐん成長するのであり、たとえ手でかき回してもこの成長の静かなプロセスを速めることはできない。

植物、すなわち内面の中だけに真理が見出される。この内面的な勉強は結果として本や言葉が約束するものに対抗する。あらゆる可能性、あらゆる幻想、あらゆる母体が人間の内面に落ちて唯一の内面的真理、唯一の明晰さ、唯一の成長する植物となる。これが勉強の本質であり、ビリーの著作の読者が求めるべきものである。

新刊 瞑想について



スイス FIGU 基幹会員のシュテファン・リッカウアー、シモーネ・リッカウアー夫妻を招待して行われたフィグ・ヤーパン講演会(2005年10月2日開催)の録画記録ビデオです。同時通訳は、『わずかばかりの知識と知覚そして知恵』をはじめとする FIGU の書籍の翻訳を手掛けられている、シュトラッサー・節子氏です。お求めの際は、VHS、DVDいずれかの形式をご指定ください。定価はともに3,000円(税込み)、送料計算のための重量はVHS 240グラム、DVD 105グラムです。

「瞑想について」内容

講演1 瞑想入門「サティパターン瞑想について」
シモーネ・リッカウアー
サティパターン瞑想の起源と教えの発生について。その注目すべき過去および数千年にさかのぼる歴史。

講演2 瞑想入門「注意力集中への道」
シュテファン・リッカウアー
注意力集中とは何か。なぜ注意力集中が必要か。注意力集中と瞑想の関係は何か。



49 項目の質問と回答

— 生命と人間存在の全般に関する 49 の質問に回答するための道しるべ —

22. なぜ戦争は昔からずっとあるのですか？

Arahat Athersata

Kapitel 3, Satz 119-121

数百年、数千年の昔から、地球の民族のあらゆる指導層には、認識と愛と真理に関する知識と英知が欠けている。そして現代において、これら指導層にとって創造およびその法則と掟に関する知識と英知は、彼らが戦争や殺戮^{さつりく}に駆り立てることによって罪もなく流された一人の人間の血ほどの値もしないのである。このような指導体制のもとで地球人に残されたものと言え、死の奈落へと滑り落ちる道あるのみである。

23. 第三次世界大戦は避けられますか、避けられませんか？

OM

Kanon 36, Vers 64-70

地球人は第三次世界大戦の虜^{とりこ}となり、数多くの戦争や雄叫びが地球全体に響き渡る。民族同士、家族同士が互いに対立する。死の炎が地球上を駆け巡り、人間をまるで厄介な害虫のように皆殺しにする。こうして地球人がそれまで狂気の沙汰にも挑んできた創造の法則と掟が履行される。民族の多くが自分の罪によって、偽善者と盲目の罪によって、坊主と偽の教師や指導者の罪によって、権力者や裁判官、執行者や創造からの離反者によって滅びるのである。人間の間にいる蛇蝎^{だかつ やから}の輩は自分自身の罪によって滅ぼされるであろう。地球上には死の太陽が照り輝き、狂気を止めることのできるものは何もない。こうして地球の人間は方向を転換して創造の道に向かわないならば、自分が犯したあらゆる人殺しの罪のために自ら罰し、滅びるといふ古い予言が的中する。

Prophetien

Mittwoch, 28. Januar 1976 (Petale)

人間が本当に円満な状態へ、純粋に霊的なもの、まことの誠実さと、より普遍的な愛、そして一切を包含する調和へ向かって歩まなければ、恐るべき予

言が残酷にも的中し、それはいつまでも続くであろう。1974 年以降、核による地球の完全破壊は巨大で普遍的な力によって避けられているが、第三次世界大戦の危険は回避されない。それはすでに芽を出しており、侮蔑^{ぶべつ}に満ちた平和な時代に突如として暴力的にやってくる。この地球の人間は夜安らぎに満ちて横になるが、平和の真っ只中で戦争の雄叫びによって眠りを破られるのだ。だが人間は現在まだ善いことや、愛と平和と調和の中での霊の道を考えてはいない。

Stimme der Wassermannzeit

Nr. 35, Der dritte Weltkrieg ...

現代の多くのいわゆる予知能力者や予言者（偉がり屋）は、第三次世界大戦はもはや起こらないと主張する。しかしこれらの主張は真理に基づくものではない。それらはそうした主張を掲げる者たち自身の際限のない不安に対する気休めにすぎないのである。第三次世界大戦が起こらないという主張の中には臆病^{おくびょう}さも相応に含まれている。なぜならば、そのような嘘を主張する者たちはまさしく臆病さから、与えられた事実と直面しようとしなからである。ここではっきり言うておくと、第三次世界大戦は必ず来る。第三次世界大戦は、祈禱^{きとう}の後に坊主が必ずアーメンと言うくらい確実に訪れる。そしてこの第三次世界大戦はもはや防ぐことはできないが、これにはカルト宗教が少なからぬ罪を負っているのである。

24. 個人は平和のために何ができますか？

Die Uhr schlägt eben Zwölf

Seite 127, Satz 1-4 und Seiten 228/229

平和とは単なる言葉ではなく…計り知れない価値を持った概念である。

しかし世界平和は小さなところから始まる。自分の家やごく身近な周囲で「戦争」をしていたら地球上に平和を生み出すことは決してできない。最初に身近な場所や自分自身の中で、それから友人、親戚、知人、そして仕事や余暇で日々出会う人々との間で

平和を生み出していかなければならない。世界平和の努力は小さいところから始まり、それから次第に拡大していく必要がある。このことは、世界情勢や低劣な出来事がどうであろうと、小さいところでの結び付きを求める。

25. 預言された破局を防ぐために何ができますか？

Stimme der Wassermannzeit

Nr. 52, Eine letzte Chance ...

さて、善い意志のあるところには道もある。この道をビリーの地球外の友人は最近極めてはっきり明確に示した。解決の標語は非常に簡潔な「平和瞑想」である。すべてが考えられる限り単純であり、金銭的な費用や、物質的な補助手段などを要することなく誰でも実行できる。必要なのは少しばかりの時間と善い意志だけである。

プレアデス人の説明によれば、我々は直ちにいわゆる平和瞑想を始めることによって、第三次世界大戦の勃発を数年遅らせ、その残忍さを緩和できる可能性がある。

26. 時は切迫している！.. 今日果たせることを明日に延ばすことなかれ。変化と改良のためにあなたの関与が必要です！

Die Uhr schlägt eben Zwölf

我々はすべての邪悪を直視し、あるがままの姿で認識しなければならない。そしてあらゆる邪悪の根を直接つかんで根こそぎにするのだ。しかしながらこれは、自分たちの子孫のためにも公正で健全で自由な世界、正しく管理・統制された天国を創り出そうという、責任感のあるすべての人々の積極的な支援と協力なしにはできない。

それゆえ、権力亡者や知ったかぶり屋、無責任者や物質主義者の狂気との戦いにおいて君と君のすべての力と援助が必要なのだ。彼らは自分たちの利潤欲と権力欲を満たすことしか眼中になく、世界や隣人の命などどうでもいいのである。あなたが生けるすべてのものに対していくばくかの義務感と責任を担おうとするなら、あなたも我々の仲間である。だ

からいつまでもためらわずに我々に合流し、我々と共にこの世界の狂気に対する戦いに赴き、存続のためのこの戦いであなたの能力も考え得る限り、実行し得る限り傾注するのだ。あなたもまた必要とされておられ、この存続を賭けた戦いでなくてはならない存在なのである。

27. 愛とは何ですか？

Gesetz der Liebe

愛とは、自分が万物の中で、それゆえすべての存在者、すなわち動物相と植物相、人間、種類を問わずあらゆる物質的および霊的生命体の中で、全宇宙の存立において、さらにはそれをも越えて共生・共存しているということの絶対的な確信である。

それゆえ本来の定義における愛は、次のことを意味する。

植物であるか、霊体であるか、動物であるか、惑星または星であるか、あるいは人間であるかは全く問わず、あらゆる存在の中で、他の存在は自分自身の存在の部分存在であることの絶対的な確信と感覚を抱きながら共生しているという絶対的な確信を感じる。

愛とは、すべての生命は自分の生命の一部であることを絶対的に確信し、絶対的に知り、絶対的に感じ、そして絶対的に把握することである。なぜならば万物は一体となってあらゆる存在の絶対永遠の存在における全我々形態をなし、愛を知り感受することにおいてのみ全実在存在として存在できるからである。

それゆえ愛とは全宇宙、さらにはそれをも越えて存在するすべての生命体との全く固有の共同性において、そしてまた自分の存在は他のすべての存在する生命形態の部分存在であるとともに、他の生命形態の存在も自分自身の存在の部分であり、全宇宙のすべての生命形態は真実そうであるがゆえに存在しているという絶対的な英知において、絶対的に知り感じ取ること、絶対的に感じ共生することである。

Dekalog

Nachwort, Seite 135

愛は人間の心情の鼓動でなければならない。なぜ

なら愛は平和、自由、知識そして英知への唯一の道だからである。しかし創造に対する愛、すべての生命形態に対する愛を感じることは、畏敬の念を起こさ

せるすべてのものを敬い、これを承認しつつ義務を果たすことを意味する。

(出典：『49 項目の質問と回答』)

フィグ・ヤーパンからのお知らせ

□ 今年出る本 □

FIGUスイスによる『瞑想入門』の原文校正作業が完了し、変更箇所の確認と再翻訳の実施を終え、版下の作成を進めています。コードが含まれるため、ドイツ語原文を含めて、500 ページを超える大作となります。もうしばらくお時間をいただきますが、ご理解くださいますようお願いいたします。春までには出版のご案内を差し上げる予定です。

さらに、コンタクトシリーズ第3巻となる、『ブレアデス／プレヤール人とのコンタクト記録(3)』の翻訳作業が終了し、現在校正作業が進められています。順調に作業が進めば、夏頃に出版することができます。これに加えて、ビリー・マイヤーが高次の霊水準からのインスピレーションを受けて記した『アラハト・アテルザータ』の翻訳が完了し、現在校正作業が進められています。本書の出版は秋頃にご案内する予定です。

書籍の他にも、小冊子類や時事的な内容を含んだ『FIGU特別公報』等についても、予算や作業量の許す限り、少しでも多く発行したいと考えております。なお、フィグ・ヤーパンの出版活動についてご意見、ご要望等がありましたら、ご一報くださいますようお願いいたします。本年もフィグ・ヤーパンの翻訳出版活動にどうぞご期待ください。

□ 個人情報保護方針 □

フィグ・ヤーパンは、本誌の購読希望や書籍等の購入申し込み、行事の開催等に際して、読者の皆様から個人情報をお預かりしています。これらのデータは、個人情報保護法に基づいて、適正に管理、運用いたします。

個人情報をお預かりする場合は、前もって使用目的を明らかにし、その目的の範囲内でのみ、使用させていただきます。

また、ご提供いただいた個人情報を、ご本人の承

諾がある場合あるいは正当な理由がある場合を除き、第三者に開示または提供しません。

個人情報の取り扱いについて、情報の開示、訂正、削除等を求められた場合には、所定の手続きに従って、ご請求に誠実かつ迅速に対応します。

フィグ・ヤーパンでは、個人情報保護の重要性を認識し、個人情報を適切に利用し、保護する活動に継続的に取り組み、これを改善していきます。

なお、フィグ・ヤーパンからお送りする『フィグ・ヤーパン通信』や行事のご案内等には、原則として、送付がご不要な場合はその旨をお申し出になれるよう問い合わせ先を記載してあります。ご不要な場合は、フィグ・ヤーパンまでご連絡ください。

□ 著作権の保護にご協力ください □

日本国内でのFIGUの書籍や写真類をはじめとする全ての著作物は、ビリー・マイヤーとの間で交わされた契約によって、フィグ・ヤーパンのみに利用権が認められています。これは、ビリー・マイヤーによる貴重な著作物や歴史的な価値を有する資料を厳格に保存することを目的としたものです。しかし残念ながら、著作物の無断使用や不適切な個人的見解と混合させた情報を、インターネットや著作物の出版を通じて行う者が後を絶ちません。このような違法行為は全世界で繰り返し行われており、また日本でも例外ではありません。著作権法に違反する行為は、どのような意図で行われたものであっても、結果的にビリー・マイヤーによる著作の価値を貶めることとなります。フィグ・ヤーパンでは、著作権を保護するための監視を行うとともに、その対策を強化する予定です。貴重な著作物の保護にご協力くださいますようお願いいたします。なお、著作権法に違反する使用が認められた場合には、フィグ・ヤーパンまでご一報くださいますようお願いいたします。

出版物のご案内

■プレアデス／プレヤール人とのコンタクト記録(1)

価格 2,000 円 (税込 送料別 375 グラム)

■プレアデス／プレヤール人とのコンタクト記録(2)

価格 2,000 円 (税込 送料別 440 グラム)

■わずかばかりの知識と知覚そして知恵(新風舎刊)

価格 3,150 円 (税込 送料別 870 グラム)

■宇宙の深遠より 一地球外知的生命プレアデスとのコンタクト (徳間書店刊)

価格 2,940 円 (税込 送料別 550 グラム)

■日本語版 水瓶座時代の声

価格 各 1,000 円 (税込)

83/2 号 (特集) (送料別 105 グラム)

87/1 号 (特集) (送料別 140 グラム)

91/1 号 (特集) (送料別 135 グラム)

■第 235 回会見

価格 500 円 (税込 送料別 70 グラム)

■日本語版 FIGU 公報

6 号 価格 500 円 (税込 送料別 90 グラム)

30 号 価格 500 円 (税込 送料別 155 グラム)

38 号 価格 500 円 (税込 送料別 160 グラム)

■精神と物質の生命

価格 500 円 (税込 送料別 55 グラム)

■ピリーの少年時代の著作

価格 500 円 (税込 送料別 95 グラム)

■預言者エレミヤとエリヤの予告

価格 400 円 (税込 送料別 70 グラム)

■エノクの預言

価格 300 円 (税込 送料別 55 グラム)

■『瞑想入門』の手引き

価格 300 円 (税込 送料別 70 グラム)

■地球に平和あれ

価格 300 円 (税込 送料別 55 グラム)

■昨日、今日、明日の心配に関する考察

価格 100 円 (税込 送料別 15 グラム)

■生と死は互いに切り離しがたく結びついている

価格 100 円 (税込 送料別 25 グラム)

■FIGUの原則あるいは人間の原則

価格 300 円 (税込 送料別 40 グラム)

■プレヤール人が地球人に望むこと

価格 200 円 (税込 送料別 30 グラム)

※このページに掲載した以外にも多数の書籍があります。ホームページ等をご覧いただくか、フィグ・ヤーパンまでお問い合わせください。

□ 書籍のご注文について □

すべての書籍・ビデオ類のご注文は、郵便振替にて承っております。ご希望の書籍・ビデオ代金に以下の郵便料金を加えた金額を、お近くの郵便局から下記フィグ・ヤーパンの口座宛にお振込みください。なお、現金書留および切手同封による直接のお申し込みはご遠慮ください。

□ 郵便料金表 □

50 グラムまで 120 円	500 グラムまで 290 円
100 グラムまで 140 円	1000 グラムまで 340 円
150 グラムまで 180 円	2000 グラムまで 450 円
250 グラムまで 210 円	3000 グラムまで 590 円

※ 15,000 円以上あるいは 3000 グラムを超える

場合の郵送料は無料です。

□ 振込用紙の記入欄 □

口座番号：00160-4-655758

加入者名：FIGU-JAPAN

(アルファベットで記入して下さい)

金額：送料を含めた合計金額

払込人：あなたの住所、氏名、電話番号

通信欄：購入する書籍名と冊数

フィグ・ヤーパン通信 第 25 号 (無料)

発行日 2006 年 1 月 1 日

発行 フィグ・ヤーパン (FIGU-JAPAN)

住所 〒192-0916

東京都八王子市みなみ野 3-11-2-305

電話 0426 (35) 3741

FAX 0426 (37) 1524

URL <http://jp.figu.org/>

E-mail jp@figu.org

郵便振替 00160-4-655758

加入者名 FIGU-JAPAN

本書の全部または一部を無断で複製複製することは、著作権法上の例外を除き禁じられています。本書からの複製を希望される場合は、フィグ・ヤーパンにご連絡ください。

Copyright (c) 2006 by FIGU-JAPAN. All rights reserved.